25）塞栓術を行った部分血栓化巨大椎骨動脈瘤の1例

渡部　洋一・及川　友好（福島赤十字病院 脳神経外科）

後頭蓋窩の巨大動脈瘤は進行性の脳幹圧迫症状を呈することが多く，保存的治療の予後は不良であると言われている．今回われわれは，部分血栓化巨大椎骨動脈瘤に対しコイル塞栓術を行った症例を経験したので報告する．

症例は70才，男性．複視と歩行障害を主訴に当科を受診した．7年前に大動脈弁閉鎖不全症のため弁置換術が行われており，ワーファリンを内服中であった．CT では脳幹前面に 32 mm の円形の高吸収域と正常圧水頭症の所見を認めた．3D－CTA の所見から右椎骨動脈の部分血栓化巨大動脈瘤と診断した．弁置換術後のため抗凝固療法を続けなければならないことから塞栓術を選択し，コイルを用いて PICA 起死部の遠位から椎骨動脈合流部の近位まで，動脈瘤柄部を含めた右椎骨動脈のトラッピングを行った．さらに V－P シャントを行った．術後，症状は改善して歩行可能となり自宅に退院した．塞栓術から1年が経過したが，経過は良好で外来に通院中である．

26）高齢者破裂脳動脈瘤に対する急性期コイル塞栓術の治療成績

熊谷　孝・武田　憲夫
井上　明・井渕　安雄
斎藤　有庸（山形県立中央病院 脳神経外科）

【目的】高齢者（75歳以上）破裂脳動脈瘤に対する急性期コイル塞栓術の治療成績を報告する．【対象，方法】1997年12月以降に当科で治療した8例（全例女性，平均年齢80歳，H&K Ⅱ：2，Ⅲ：2，Ⅳ：4，Fisher Ⅱ：2，Ⅲ：6，A com：5，IC：3）を対象とした．発症6－24時間で全麻下にコイル塞栓術，腰椎ドレナージ（UK 投与3例）を行い，症候性血管攣縮（SVS）に対しては hemodilution と塩酸ファスジル，オザグレルナトリウム投与で対処した．【結果】全例95－100％塞栓が得られ VER は平均21％であった．術中の再出血を含めた合併症はなかった．SVS は4例で内1例が脱落症状を残した．6例が水頭症を併発し V－P shunt を要した．転帰は GR：5，MD：2，SD：1（GR＋MD：87.5％）であった．1－24ヶ月の追跡脳血管撮影で1例のみに coil compaction を認めたが再出血例はない．【結論】75歳以上の高齢者破裂脳動脈瘤でも急性期血管内治療は良好な予後が期待できる．

27）再度の血管撮影で診断された ICA trunk aneurysm の3例

安孫子　尚・安斉　高穂
金木　慎哉（大原総合病院附属 大原医療センター 脳神経外科）

脳血管撮影を繰り返すうちに診断された ICA trunk aneurysm の3例を経験したので報告する．症例1は35歳の女性．SAH にて発症し，脳血管撮影（AG）で右中大脳動脈瘤を認めたため，clipping（CL）を施行したが，未破裂であった．術後10日目に再度 SAH をきたしたため AG を行ったところ，左 C2部に動脈瘤（AN）を認め CL を施行した．症例2は33歳の女性．SAH で発症したが，2回目の AG で右 C2部に AN が確認された．CL を施行し，結果は GR であった．症例3は53歳の女性．SAH 後，2回目の AG で右 C1部に AN を確認した．CL と muscle wrapping を行い，GR であった．この部の AN は急性期には確認されにくいことを念頭におくべきである．

28）クモ膜下出血で発症し急性期に閉塞と再開通を来した椎骨動脈解離性動脈瘤の一例

遠藤　英彦・太田原康成
阿部　深雪・小笠原邦昭
土肥　守・小川　彰（岩手医科大学 脳神経外科）

椎骨動脈解離性動脈瘤によるクモ膜下出血で，病変部の閉塞と再開通を来すという稀な経過を呈した症例を経験したので報告する．

症例は47歳男性．突然の頭痛に引き続く意識障害で発症した．来院時の意識レベルは JCS 2で麻痺はなく，CT にてクモ膜下出血を認めた．直ちに行った脳血管撮影では後下小脳動脈の起始部を含む右椎骨動脈に pearl and string sign を認め，解離性動脈瘤と診断した．その12時間後に意識レベルが低下したため再度脳血管撮影を施行したところ右椎骨動脈は後下小脳動脈の分岐直後で閉塞していた．第4病日の脳血管撮影では右椎骨動脈は再開通しており，右椎骨動脈の trapping と PICA－PICA anastomosis を施行した．